



キャンパス
ミュージアム散策

絵・文 / 松永 拓己

大学院教育学研究科
教授・芸術家

熊薬ミュージアム

産業イノベーションラボラトリー
(薬草ミュージアム、フェルメール リ・
クリエイト)

薬用植物園(薬草パーク)

熊本市中央区大江本町5-1 入場無料
★見学受付・お問い合わせは、下記メールアドレスまで
kumayaku-vm@jimu.kumamoto-u.ac.jp
★ただし、薬用植物園は随時開放のため、見学自由
交通機関 / バス・熊本市電をご利用の場合、
「味噌天神」バス停・電停下車徒歩1分
★イラスト画はヨハネス・フェルメール作「真珠の耳飾り
の少女」を参考資料として制作

薬とは。心身に効く薬とは。

熊本大学内の小道をゆく。

味噌天神前バス停からすぐの所に、薬学部の熊薬ミュージアム、産業イノベーションラボラトリー、薬用植物園がある。

季節ごとに生い茂る草花や木々の茂みの中の解説板を見ながら構内をグルリと回ってみる。香^{かぐわ}しい。館内では樹皮や草などが珍重され、戦前からの文物が置かれている。散策しながら、「薬とは」と問いかけるに丁度よい。

そして、産業イノベーションラボラトリーでは、ヨハネス・フェルメールのリ・クリエイト全37作品らが出迎える。……薬と美の競演とは、こういうことかと合点がいく。身体を健やかにさせる「お薬」は、どうやら精神からも届けることが何よりなのであろう。研究・開発にもその効能をとでも言うかのように、知的で美的で刺激的な空気の薬が漂う環境がそこにあった。ふと一枚の曼陀羅^{まんだら}図に目が留まる。ブータン国との国際交流による作品とのこと。中央には仏教の薬師(瑠璃光)如来像が描かれている。昔も今も薬師さんは衆生の病を取り除き、健やかなれということなのか。

ゆっくり優に1時間は浸っている。「世に無駄な雑草などあるのかしら」フェルメールの絵が振り返って何かを語ってくれているようだ。ここには熊本大学薬学部の前身である「蕃^{ばん}滋^じ園^{えん}」(宝暦6(1756)年)から携わった人たちと文物の歴史と美がある。

